
とある最強の能力窃盗者

林檎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある最強の能力窃盗者

【Nコード】

N4749X

【作者名】

林檎

【あらすじ】

ある日、朝風恭介はトラックに轢かれて死ぬ。そして、神に能力を貰い受け、『とある魔術の禁書目録』の世界に送られる。そこで恭介は何をするのだろうか？究極のめんどくさがり屋が原作プレイクをしていく！！主人公は普通にチートです。更新が遅いので期待しないでください。そして、駄作です。

プロローグ く怠惰の人間く

「はあ、ダリイ……………」。

俺はふと呟く。

俺の名前は朝風あさかぜ 恭介きょうすけ。

高校一年生。身長175センチ体重55キロ。髪の色は黒で短いショート。

ごくごく普通の高校生。人と違うのは

「聞いているのか！朝風！」

すると、数学の教師が俺に怒鳴り上げをあげる。

「全然聞いてません。だるいんで。」

「チツ！ならこの問題解け！！！」

「…………… a 2です……………」。

「チツ！」

異常と思うくらい頭の良さで性格。

俺はこれ以上とないめんどくさがり屋で天性の才能を持つ。

運動神経は抜群。成績は学年トップどころか全国トップクラス。

だが、くだらない。こんな生活が……………こんな人生が変わってしまえばいいのに……………。

「はあ……………やっと終わった……………」

授業は終わり、HRも終わった。

さっさと帰って寝よ……………。

俺が教室を出ようとする後ろから声をかけられる。

「よっ！一緒に帰ろうぜ。恭介。」

俺は返事もせず、靴箱の方へ向かう。

コイツの名前は鳴神なるかみ武たけし。俺の唯一の友達とでも言っておこう。

「お前また、教師に齒向かったんだって？よくやるよなあ。」

「あのカスが俺にあてたからだよ。安眠妨害だ。」

武は少し笑う。

「こんな高校よりもっといい高校行きゃあよかったなのになんでこんな高校に来たんだよ？」

……………俺のいる高校。

世間から言う三流高校だ。なんで俺がこんな高校いるかというところ…

……………。

めんどくさかったからだ。

受験するのも勉強するのも家から動くのも。だから、家から一番近い学校にした。勉強しなくてもいい学校にした。

周りの奴は自分達を見下しに来た。とか言ってる。だから俺にはだれも近づかない。教師も俺の事を嫌ってる。

俺に近づく馬鹿はコイツくらいだ。

親は俺の事を諦めている。

俺には二つ年下の妹がいる。親はそっちに期待している。

俺はふと前を見る。

そこには一組の親子がいた。

「きょうね〜。ちかちゃんとお人形であそんだんだよ。」

「よかったね〜。ちかちゃんにちゃんとバイバイした？」

「うんっ!！」

幸せそうな会話。

俺はあんな会話をした事があるのだろうか？

親の話によると俺は幼児時代もめんどくさがり屋だったらしい。

何かと理屈をつけて物事をさぼりたがるって言ってたのを覚えてる。

俺は飽きているのだ……………。

こんな人生を……………。

「……………かわんねーかな。こんなくだらない世界……………。」

「ん？なんか言ったか？」

「……………いいや、何も。」

すると、後ろから空気を裂く音が聞こえる。

俺が後ろを向くと大型トラックが俺達の方に突っ込んできていた。

「…………マジかよ…………。」

俺は武の襟首を持ち、トラックが当たらない所に投げ飛ばす。

「……………つてえな！なに

っ！？恭介！！！！？」

俺は脚に力をため前の親子の方に駆け出す。

親の方は異常に気付いた様でこつちを見ていた。

俺は親子をトラックが当たらない場所に押し出す。

「はぁ、避けるのもめんどくせえな。」

俺は笑う。

なんで笑うって？

簡単だ。呆れてるんだよ。

俺が世界よ変われって言ったら、人生が終わろうとするんだぜ？

笑うしかねえだろ？

俺は突き飛ばした、親子を見る。

「……………まあ、俺が生きてたって世界に迷惑かけるだけだ。お前みたいな将来性がある奴が世界を変えるよ？」

俺は小さな男の子に言う。

そして、俺は宙に舞った。空高く飛んだ。

ノーバウンドで十メートルほど飛び、五メートル程を三バウンドする。

全身に激痛が走る。

俺はどっかのアニメの主人公じゃあねえーから死ぬに決まってる。

まあ、楽しくない人生だったけど……離れると思っただら名残惜しいな。

とんだ親不孝だし、唯一の友達にも悲しませちまったな。

ん？体が揺れてる？

ああ、武が揺らしてんのか……。

すると、俺の頬に暖かい液体が落ちてくる。

泣いてんのか？武？

泣くなよ。お前らしくない。

でもまあ、俺の為に泣いてくれる人がいるならそれでいいか……

…。

俺は最後に何か言おうと考えたが面倒だったのでやめた。

もう、意識を保つのもめんどくせえ……。

俺はそこで意識を手放した。

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

「……………うつ……………ここはどこだ？」

俺が目を覚ますと何もなかった。

何も無い真っ白な空間。永遠とそれが続く。壁も天井も床も……………。

平衡感覚が狂うような空間だ。

「ここがああ世ってか？」

空間に俺の声が響く。

あーあ、俺ほんとに死んだんだな。

「こ、こんにちは……………」

後ろから声が聞こえる。

俺はそんな事どうでもいいのでねっ転がり、寝よじとする。

「こんにちは……………」

結構、明るいな……………。

俺は真っ暗じゃないと眠れない派なんだ。

「こんにちは……………」

ま、目瞑ってりゃあ寝れるだろ。

「無視しないでください！！」

ツチ！うるせーな……………。

「いや、うるさいじゃなくて……………」

はいはい……………って、

俺はゆっくりと起き上がる。

そこには十歳から十二歳……………まあ、ロリコンが好きそうな美少女

？が立っていた。

「…………俺の心読んだのか？」

「はいっ！一応神様ですから！！」

神って…………。

電波ちゃんかお前は？

「電波じゃないです！！本当に神様なんです！！」

はいはい。分かったから、黙ってる。

「……………むう。せつかくもう一回人生をあげようと思ったのに…

……………」

人生をあげる？

「つまり、オマエが俺を殺したのか？」

「ちょっと違います。あなたはあの世界で最も怠惰の感情が強かったので神罰を与えたんです。」

迷惑な話だ。

「で、俺を生き返してくれんのか？」

「元の世界に戻すことはできません。これは決まりですから。」

ほほう。

つまり俺は一生ここにいろってか？

「いいえ。あなたには別の世界に転生してもらいます。」

転生？

よく、二次小説とかで聞くあれか？

おっと、言うのを忘れてたが俺は案外なオタクだ。気をつける。

「それはいい。で、俺は何処の世界に行くんだ？できればここにいたいのだが？」

「ここに居てはいきません。魂は何かの入れ物に入っていないと消えてしまいますから。」

へえ〜。

なら、俺は何処に行くんだ？

「まあ、あなたの本棚の一番上にあつた『とある魔術の禁書目録』って言うのはどうですか？」

『とある』の世界かあ〜。

でも、ダリいな。また、受験とかしないとダメなんだろう？あと、死ぬ可能性あるし。パスパス。

「えっ！？もう駄目ですよ！それで書類出しちゃったから……………」。

そんなこと言われてもな。

「う〜ん……………。そうだ！私が二つだけ願い事を聞いてあげます！
「！」

なんでお前は俺にそこまでしたいの？

「あなたが人生を楽しむ。それが私、神の仕事ですから。」

「なら、能力を一つくれ。」

「なんですか？」

「能力名は『能力窃盗者』。どんなのかというと……俺の体表面上に振れた能力者は俺に能力を一時的に奪われる。そして、俺が能力に触れたらそれをコピーして俺の頭の中に保存する事が出来てその保存した能力を何時でも、そして、何個でも使える……って能力だ。」

「チートですね。」

「はいはい。できるよな？」

「神に出来ないことなんてないです。」

じゃあ、あとひとつは……。

「俺の……友達と家族を幸せにやってくれ。」

「いいんですか？自分に利益がないですけど……。」

いいんだよ。

これが俺ができる最高の恩返しだから。

「はい。分かりました。あなたの友達と家族は私の力でできる限り幸せにします。」

ヨロシクな。

「では、あなたを『とある魔術の禁書目録』の世界に送ります。」
すると、俺の後ろに大きな扉が出てくる。
俺はそれをゆっくりと開ける。

「じゃあな、小さい女神さん。」

「ち、小さくないです……………」

俺はそのまま、扉の中に入る。
これから、俺の第二の人生が始まるのである。

……………だりい。

プロローグ く怠情の人間く（後書き）

恭介「……………」

林檎「ほら！挨拶！」

恭介「……大体お前、まだ他の作品残ってんじゃねーのかよ……………」
「？」

林檎「まあ、残ってるけど……………。あれだよ！あれ！気分転換！！！」

恭介「はあ……………。こんなに投稿したら読者のやつらが困るだろ？」

林檎「……………すみません。」

恭介「はあ、ダリイ……………」

林檎「……………」『とある科学の凍結光線』もよろしくね！！！」

恭介「……………死ねばいいのに。」

第一話 入学式？何それ？おいしいの？（前書き）

恭介「……………」。

林檎「……………」。

恭介「……………」。

林檎「……………」なんか言えよ!?!」

恭介「……………」黙れ。」

林檎「そう言うのじゃなくな？もっとこう……………始めますよ的な事を!?!」

恭介「今回で『とある最強の能力窃盗者』は終わります。」

林檎「いや!?違うだろ!?!大体、終わらないよ!?!まだ一話だよ!?!」

恭介「……………」めんどくせエ奴……………」。

林檎「……………」もういいよ。君には期待しない……………。では、第一話どうぞ……………」。

恭介「……………」ダリイ。」

第一話 入学式？何それ？おいしいの？

「……………」

俺が目を覚ますと何処かの部屋にいた。

窓をみるとビルなどが見える。どうやら、寮かどこかのマンションかと思う。

俺が部屋を見渡すと机の上に手紙があった。

「読めってか……………」

はあ、ほんとダリイ……………」

俺はめんどくさそうに手紙を開ける。

『こんにちわ！恭介さん！神です！！』

捨てようかと思った。

だが、ここがどこなのかわからないので俺は続きを読む。

『あなたのいる場所はこの物語の主人公、上条当麻の居る寮です！
てか、部屋隣です！』

まじかよ……………」

おまえは俺にどれだけ原作に介入させたいんだ？

『あつ！言い忘れてましたけど、今日は入学式ですよ！サボらない
てくださいね！！』

手紙を読んでもテンションが高い奴だ。

それにしても入学式か……。ダリイ……。前世ではサボったしな。今回もサボろう。うん。

『……………サボらないですよね?』

死にそんな字で書いている。
わざとだよな?

『あと、あなたには強制的に原作に介入してもらいますから、覚悟して下さい。』

……………。
殺そうか?

俺は手紙を握りつぶすとクローゼットを開ける。

「……………面倒だけど、行くか……………。」

俺はゆっくり着替え始める。

そして、冷蔵庫を開けるが何も入ってなかった。

「……………当たり前か……………。」

その前に金はどうするんだろう?

俺は部屋をもう一度見渡すと一つの通帳を見つける。
俺はそれを開き中を見る。

「……………これって、高校生の持つ額じゃないだろ?」

すると、通帳から一枚の紙が落ちてくる。

俺はそれを拾い、読む。

『一桁間違えちゃった テへ by神様』

まあ、これはこれでいいけど………………。てか、一桁間違えなくて
も国を動かせる金額だぞ？

俺は制服に着替え、飯はあきらめ家を出る前に時計を確認する。

「八時か………………。こっから学校までどれくらいかかるんだ？」

まあ、適当に八時半ぐらいだろう。

さすがに行くなら早く行きたい。入学式初日から遅刻とか教師に目
をつけられそうだから。それはそれで面倒だ。

俺は部屋を出るとそこには金髪でサングラスをかけてアロハシャツ
を着た変態と遭遇する。

俺は早速原作に介入していると実感しながら変態を見つめる。

「ん？どうしたんだにゃ〜？」

確か、土御門元春。

主人公の部屋の隣に住んでる主人公の友達。

イギリス清教『必要悪の教会』^{ネセサリウス}所属の魔術師。都市の暗部組織「グ
ループ」のリーダー的存在。(Wikipediaより)

「……………いや、なんでも……………」

俺は土御門を抜かしてエレベーターの方に行く。

「名前はなんて言うにゃ〜？」

めんどくさい奴だ……………。

「朝風……恭介だ……。」

「俺は土御門元春だぜい。よろしくな、あさやん。」

あさやんって……。

そういえばコツの能力って確か……。

俺は手を出す。

「ん？なんだにゃ〜？」

「……握手。」

土御門は少し考えて俺の手を握る。

そして、能力を使う。

すると、俺の頭の中に土御門の能力の情報が流れてくる。

俺はそれをコピーそして保存する。

「どうしたんだにゃ〜？」

「……いや、なんでも。」

俺はエレベーターに乗る。

さて、わかったことがある。あの馬鹿神はすごくいい機能も付けてくれたようだ。

どうやらコピーした能力は全部レベル5級の力が手に入る様だ。

……いい仕事してんじゃねえーか。

・
・
・

・ ・ ・ ・ ・

「ふわあゝ。ねみい……………」

俺は大きな口を開けて欠伸をする。

土御門と一緒にここに来たわけだがあいつが質問やボケをしても俺はスルー。案外、傷ついたらしく机にうつ伏してる。

「はあゝい。席について下さゝい。」

すると、教室のドアが勝手に開く。

いや、よく見ると身長135cmの容姿からどう見ても小学生にしか見えない、先生…………月詠子萌が立っていた。

教室が当たり前のようにざわつく。

『なんで、小学生がいるの?』とか『あれって学園都市の七不思議のひとつじゃない?』とか『かわええなあゝ』とか……………気にしないでくれ。

「このクラスの担任をすることになった月詠子萌です。よろしく
お願いしますね。」

先生が自己紹介した後、今日の予定を色々と話し出す。すると、いきなりドアが開く。

「セーフ!？」

「アウトです。」

「ふ、ふこつだああああああつ!!!!!!!!!!」

入ってきたのはツンツンした短めの黒髪をしており、それ以外にはこれと言って特徴が無い平凡な学生。そう、この物語の主人公、上条当麻だ。

高校生活初日から寝坊という事なのでかなりのショックを受けてとぼとぼと歩きながら俺の席の隣に座る。まあ、出来るだけ関わらない事にしよう。

「では、体育館に移動しますよ。」

はあ、面倒だ。

〈体育館〉

「であるからして……………なので……………」

校長の声が左耳から入ってきて右耳の方に抜けていく。

ねみい……………。

なんだよこの長いお話は……………。なんでこんなにも次々と言葉が出てくるんだ？

はあ、ねみい……………。

〈教室〉

「では、明日も遅れずにくるんですよ？」

やっと終わった……………。

ほんと面倒だ。高校の入学式には出てないからついでに言つと中学もだ。

さて、帰って寝るか……………。もう、起きてる事がだるい。

俺は席を立ち、教室を出る。

「あさちゃん！一緒に帰ろうぜい！」

いきなりシスコンの変態さんに肩を組まれる。どうやら、朝の心の傷は治ったようだ。

俺は土御門を無視してスタスタと靴箱の方に向かう。

「待ってくれにゃ〜。」

はあ、面倒だ。だるい。

なんで土御門は俺に構うのだろうか？こんな俺を構って何が楽しいのだろうか？

まあ、無視でもしてたら勝手に離れていくだろう。

……俺は人と関わるのが嫌いだ。他人は何考えてるかもわからないし、他人に気を使うのは面倒だ。

前世ではそんな事していたら周りの奴らは勝手に離れていった。親でさえも…………。

中学時代、俺は結局孤立した。誰からも、親からも先生からも友達からも…………。

結局、俺の近くにいたのは武だけだった。

アイツは俺が無視しても、いつも俺の近くにいた。俺はアイツにだけは感謝してる。

まあ、今となつてはどうでもいい話だが………………。そんな事を考えてると、俺はもう校門近くまで来ていた。

「…………じゃあな、土御門。俺はこっちに用があるから。」

「わかったぜい。じゃあ、またにゃ〜。」

俺は土御門と別れる。

まあ、家に帰っても飯は無いからな。仕方ない。ファミレス行こう。飯は作れるけど、面倒だし、まあ、あんなに軍事資金があるのだから大丈夫だろう。

それにしても、なかなか能力が手に入らないな……。
まあ、能力か能力者の体に触れないといけないからな。まったく、
誰だ？こんなだるい能力にしたのは……。？ああ、俺か……
…。

「ってごごごだ？」

俺は気付くとどこかの路地裏にいた。

はあ、これは迷子というやつか……………。

まあ、仕方ないだろう。俺はこの学園都市に来て間もないのだから。
迷って当然だ。それにしても……………だるいな……………。

「うつひょ〜！可愛いねえ、きみ」

突然声がする。

俺はその声のする方に体を向ける。

そこには五人組みの不良にからまれてる、中学生。しかも、見たこ
のある奴。

当然、原作で、だ。

化粧がいらぬ程度に整った顔立ちで、肩まで届く短めの茶髪にハ
アピンを付けている。そして、名門常盤台中学の制服……………。
そう、御坂美琴である。

「常盤台の子かあ〜」

「何歳？」

「俺達と一緒にいい事するか？」

「って言っても、いつ帰れるかわかんねえけどさあ W W」

俺が助けに入るとでも思った？
ないね。絶対に。

俺はもう自分に利益がある事しかない。
大体、俺はまだ能力が一つしかない。俺は産まれて一度も喧嘩なんてした事がない。

ほぼ丸出しの俺が喧嘩慣れしてる不良に勝てる訳がない。
でも……………まあ、能力採取でも行ってきますか……………。
俺は不良の一人に近づき肩を持つ。

「ああ!？」

とても不機嫌そうな声をあげるが無視。

「レベル0か……………。まあ、それでも能力はあるし……………いいか……………」

どうやらレベル0の風力使い系の能力の様だ。

「てめえなんだ？」

それでも無視。

俺は2人目の不良の体を触る。

おっ！いいもんゲット。レベル0の空間移動だ。テレポートラッキー。

「チッ！ウザエんだよ!!!」

1人の不良が殴りかかってくる。

俺はさつき手に入れた空間移動で後ろに回る。

「お前はもういらねえから眠っとけ。」

不良の背中に手を当てると強烈な風が出て、不良を吹き飛ばす。不良は2バウンドして、壁にぶつかり気絶する。

「なッ!? てめえ、何しやがった!?!」

不良の一人が襲い掛かってくるが俺はそれをひらりとよける。そして、腕をつかむ。

おっ……………レベル1のベクトル系か……………。
ははっ!これで俺は一方通行より強くなったって訳だ。

「じゃあな。もう用済みだテメエらは。」

俺は一回足踏みすると、アスファルトが捲り上がる。

「なッ!?!」

不良たちは尻もちをつく。

「……………もうわかったろ?お前たちは俺には勝てない。」

「テメエ……………何もんだ?」

俺は少し黙り、ゆっくりと言う。

「……………ただのドロボウだ。」

不良たちは俺が気絶させた仲間を持って路地裏を出ようとする。

「お、覚えてるよッ！ー！」

覚えるかよ。ダリィ。

俺は御坂美琴の方を向く。

「はぁ……………あいつらはこのガキのどこがいいのだろうか……………」

「

バチッ！

と、電気が走る音が聞こえる。

やば、あの不幸人間と同じ事を言ってしまった……………。

「……………誰がガキですって……………！？」

「……………まあ、落ち着け。」

俺は御坂の頭に手を乗つける。

電撃対策&能力採取だ。

「……………ッ！？何すんのよ！？」

「はぁ、いいから黙れ。そして、ここはどこだ？」

「いいから手をどけなさいiiiiiiii！ー！」

はいはい。

俺は手をどける。

「はぁはぁ、アンタなんなのよ？」

「年上には敬語だろ？」

「てか、なんで能力が使えないのよ!？」

あ、言つとくが俺の能力は相手の能力を奪って、そして、俺が任意で返すからな。

勝手に返される訳じゃない。

だから、俺がずっと能力を持っていたら、そいつは例えあの一方通行でもただのレベル0になる。

「お前がアホだからだ。そんな事どうでもいいから、どこどこだ？」

もう一回言つが俺は迷子だ。

「キイイイイイイイ!!無視すんな!!!!」

はあ、めんどい……………。

もういいか……………。

「じゃあな……………お前は当てにならん。」

俺はビルの上にテレポートする。

「……………下でなんかサルが泣いてるが気にしないでおじつ。」

はあ、俺って人助けるような性格だったか？

……………もう、いいや。

このあと俺は二時間かけてファミレスを探して、そのあと家を三時間かけて探したのであった……………。

第一話 入学式？何それ？おいしいの？（後書き）

林檎「入学おめでとう。」

恭介「二回目だよ。」

林檎「高校生……………俺もはやくなりてえよ……………」

恭介「……………どうせ、馬鹿だから大した高校行けないのにな。」

林檎「それを言ったらおしまいだよ……………」

恭介「落ち込むなめんどい。そしてさっさと次回予告しろ。」

林檎「はあい……………。次回は……………何も考えてません……………」

恭介「はあ……………先が思いやられる……………」

オリキャラ設定

あさかせ きょうすけ
朝風 恭介

年齢は15歳。血液型O型。

学園都市のとある高校に通う高校一年生。

身長175センチ体重55キロ。髪の色は黒で短いショート。

前世では三流高校に通っており、成績は全国トップクラス。

性格は究極のめんどくさがり屋。口癖が「……ダリイ」。

ある日に友人と一組の親子をかばってトラックに轢かれて、死亡。

そして、神様に『能力窃盗者』という能力を貰い、『とある魔術の禁書目録』の世界に転生する。

・能力説明

『能力窃盗者』

レベルは測定不可能。恭介自体はレベル2の空間能力者^{テレポート}として書庫^{バンク}に登録してある。

能力の内容は恭介の体表面上に振れた能力者は恭介に能力を一時的に奪われる。そして、恭介が能力や能力者に触れる事でその能力をコピーして頭の中に保存する事が出来る。そして、その保存した能力を何時でも使える事ができて、しかも複数同時に使う事が出来る。コピーした能力はすべてレベル5クラスまで引き上げる事が出来る。

奪った能力は任意で能力を返す時間を操作できる。ただし、限界が一週間前後。

例えば能力を奪って一分で返す事も出来れば、一週間返さない事も出来る。

そして、能力を同時に使えば色々な事が出来る。

例えば、発火系の能力に発電系、水分子操作系、風力操作系、などの能力を同時に使うと、天候を操る事が可能。

くオリキャラ設定く（後書き）

誤字、脱字があったら教えてください。

感想よろです。

第二話 俺って方向音痴なんです。

「ふわあ〜……………やっとな終わった……………」。

俺は大きな欠伸をして呟く。

やっとな今日の授業が終わったところだ。

俺は荷物をまとめて教室を出る。

もう、俺が転生してから一ヶ月の月日がたっていた。

特に何もなかったが……………あつたと言えば、馬鹿三人が俺によく構うのと、不良によく絡まれると言ったところだ。

今月だけですでに十回は絡まれた。本当にめんどくさかった。

だが、利益はあつた。能力が手に入ったくらいかな。

今の俺の能力は二十種類は越えている。まあ、色々と役に立っている能力もあれば役に立っていない能力もあるのだ。

「あさや〜ん！一緒に帰りましょ！」

後ろから声をかけられる。

俺が振り向くと、そこには馬鹿が三人いた。

この物語の主人公、上条当麻（第一級フラグ建築士）と土御門元春（シスコン変態野郎）

そして皆の青髪ピアス（本名不明。第一級危険生物。女性の好みは

青髪曰く『ボクあ落下型ヒロインのみならず、義姉義妹義母義娘双子未亡人先輩後輩同級生女教師幼なじみお嬢様金髪黒髪茶髪銀髪ロングヘアセミロングショートヘアボブ縦ロールストレートツインテールポニーテールお下げ三つ編み二つ縛りウェーブくせつ毛アホ毛セーラーブレザー体操服柔道着弓道着保母さん看護婦さんメイドさん婦警さん巫女さんシスターさん軍人さん秘書さんロリシヨタツンデレチアガールスチュワーデスウェイトレス白ゴス黒ゴスチャイナドレス病弱アルビノ電波系妄想癖二重人格女王様お姫様ニーソックスガーターベルト男装の麗人メガネ目隠し眼帯包帯スクール水着ワンピース水着ビキニ水着スリングショーツ水着バカ水着人外幽霊獣耳娘まであらゆる女性を迎え入れる包容力を持つてるんよ？』だそうです。)

「……………嫌だ。」

俺は青髪の誘いを断る。

「あつはー！わいはそのあさやんのドSの所が好きやでー！！」

……………殺していいかな？

「いいじゃねえーか恭介。どうせ青髪以外は同じ寮なんだからよ。」

「そうだけい。あさやん。」

「大体、あさやんだけで帰ったら、何処行くかはわからへんからな。」

……………。

いい忘れてたが、俺は方向音痴だ。しかも、重症の。

この前のファミレス行くときだって、携帯を見ながら二時間もかかった。

数週間前にだって、学校から帰ってたらいつの間にか別の学区にいたしな。そのあと、警備員アンチスキルに保護され、寮に生還。だが、そのあと飯を食べに行き、さらに迷子に。

前世でも、小学生の時に遠足で近くの山に行き、数十分後に遭難。そして、クマとの出会い。クマとのおいかっこ。クマとの激闘の末2日かけて生還。

一番ヤバかったのが、家族でヨーロッパの方に海外旅行に行ったときに、迷いに迷って、気づいたら中国にいたっけ？そこから、国境を越えて、言語を理解して、密入国して、色々あったけど二週間かけて日本に生還。その時の親の発言がこれ。『恭介ならそのうち帰ってくると思ってたよ。』そんな感じで警察にも誰にも言わなかったらしい。結局心配してたのは俺の妹だけらしい。

だから俺は前世では武がないともうすでに学校を行き来できなかったのだ。

「……………はあ。」

俺はため息をつく。

なんで俺なんかにかまうのだろうか？面倒なのに迷惑なのに。

俺は追い払う気も失せて、靴箱の方に歩き始める。

「おい！待ってよ！」

馬鹿犬共が俺について来る。

「はあ、俺の後ろ歩けよ？馬鹿犬ども。」

「馬鹿犬ってなんだよ。馬鹿犬って。」

「あさやんはわいらの事を犬扱いする、ドS
ツ……………ナイス右ストレートや……………ガクツ」

ゴブ

俺は青髪に鉄拳をくらわしといてそのまま校門を出る。

「違うぜい。あさやんはツンデレで『い、一緒に帰ってあげるんだから!!』的なの
ゴハツ……………さ、さっきのは
い、痛いじゃ……………ガクツ」

俺は土御門の鳩尾にアッパーを喰らわす。ついでに言つと、ベクトル操作で攻撃力アップ。

「……………何やってんだ？お前ら……………？」

本当に面倒な奴らだ。

「じゃあな。恭介に土御門。」

そのまま、上条は自分の家に入っていく。

俺は返事も返さずに家の中に入る。今日は上条達がいたからまっすぐ家に帰れた。とでも言っておこう。それにしても汚い部屋だ。と、俺はつくづく思う。

部屋に入ると俺は制服を脱ぎ捨てる。そう言えばもうそろそろ夏服だな。って事はもう少して原作が始まると思う訳だ。さて、俺は魔術サイドに行くのか科学サイドに行くのか……………どっちもめんどくせえよ。

俺は冷蔵庫のドアを開ける。だが、中には何も入っていない。入っていると言えば入っている。お茶のペットボトルが一本。

飯買いに行くのも面倒だ。作るのも…………その前に何も無いがな。ま

あ、一日食わなくなったら死にはしないだろう。眠いし……………

「寝るか……………」

俺はベットに倒れる。そのまま俺は意識を離す。

「　　きて　　くだ　　。」

何か声が聞こえる。

もう朝なのか？まあ、いいや。どうせ今日は休みだからな。

「起きてください！！！」

俺の耳元ではつきりと聞こえるが無視しよう。

「おーきーてください！！！！！」

はあ、うるせえな。

俺はゆっくりと目を開ける。アレ？俺の家の天井ってこんなに白かったっけ？

俺は起き上がると、周りを見渡す。

何もなし。天井も壁も、床も何もかも。俺は知っている。この真っ白な空間を。

「やっと起きましたか……………」

後ろから声がする。俺が振りかえるとそこには、あの馬鹿な神がいた。

「馬鹿ってなんですか。馬鹿って。」

まあ、そんな事はどうでもいい。

俺はまた死んだのか？

「いいえ。死んでませんよ。ここはあなたの夢の中ですよ。」

夢って……………メルヘンだなおい。

俺はゆっくりと立ち上がり神を見る。

「どうしたんだ？俺に何か用か？」

「はい。少し用事があった……………」

「幼児？」

「違います！用事です！！」

まあ、コントもこれほどにして……………。

「何の用なんだ？」

「それが……………」

神は暗い顔をする。

「私とは別の神様がミスをして……」。

「別の神様？」

「はい。神様は何人もいるのですよ。私はその中の一人です。」

へー。どうでもいい。

「で、その別の神がどんなミスをしたんだ？」

「それが……あなたが元いた世界……。その世界に誤って犯罪者が能力を持って転生して、大事件を起こしちゃったのです。」

大事件？

「何したんだ？」

「大量殺人です。」

ッ！

大丈夫なのかよ？

「私達神が直接手を下して、その方は魂ごと消滅されましたが……」。

「被害が多いと。」

「はい。」

でも、いいじゃん。殺人鬼は消えたんだろ？そんな事なら別に俺を

呼ばなくても……………。

「それが……………その……………」

神は暗い顔をする。

「なんだよ。早く言え。」

神は少し黙り続きを言う。

「それが……………その被害者の中にあなたの妹がいました……………」

「

ッ!?

俺は神に近づき胸ぐらを掴む。

「約束しただろ!?! 幸せにするんじゃないのかよ!?!」

「……………すみ……………ません……………」

神の声がどんどん小さくなっていく。

俺はため息をつきながら座り込む。

「真衣^{まい}は? 真衣は何処にいるんだ?」

朝風真衣。

俺の唯一の妹。

俺とは違い、性格は正義感が強く自分から行動する様な奴。

頭は全国トップクラス。運動神経も抜群。世間から言う『できる子』だ。

まあ、頭は俺の方がいいし、運動も俺の方が出来るけどな。

「真衣さんには転生してもらいます。」

「何処にだ？」

「……………あなたのいる世界。『とある魔術の禁書目録』の世界に。」

！？

「ふざけんなよ！？あの世界は危険な事があるだろ！！」

「すみません。真衣さんのあなたを思う気持ちを優先してあの世界に送ります。」

……………。

そう言えば、真衣は俺の事をよく構う奴の一人だったな。

「なら、幸せにするんだろうな？」

「……………それはできません……………。」

「……………！？なんでだ！？」

「私とあなたの約束はあの世界だけのものです。私が幸せにできるのは……………あの世界のあなたの家族と友達だけです……………。」

すみません。」

神は俺に頭を下げる。

……どつする？コイツの言う限り、俺の願いでは真衣は幸せにはならない。
なら

「……俺が幸せにしねえといけねえのか。」

「……本当にすみません。」

「もういい。俺が守ればいいんだ。俺が幸せにしてやればいいんだ。……なら、邪魔するものは全部壊す。全部消す。そうすりゃあいいんだろ？」

神は黙りこむ。

「じゃ、俺は帰るぞ？」

「……はい。」

すると、前の様に俺の後ろに扉が出てくる。
俺はドアに手を伸ばし、そのまま、開ける。

「なあ、神さん。」

「はい？なんですか？」

「お前の名前って何だ？神は沢山いんだろ？それなら名前があったっておかしくない。神って呼びにきーからな。」

神は少し笑うと自分の名前を言う。

「ディオネです。あなたの世界にあるギリシャ神話の天空神と呼ばれるものです。」

俺は少し笑い、扉の中に入りながら言う。

「文字数多いじゃないか。」

ディオネはギャクマンガの様に足を滑らせる。

「まあ、じゃあな。ディオネ。」

「はい！」

俺はそのまま、扉の中に入っていく。

「……………まぶしい。」

俺は目を覚ますと自分の部屋にいた。

どうやら、本当に夢だったらしい。てか、真衣が何処にいるか聞くのを忘れた。どうしよう。

……………考えるのも面倒だな。まあ、適当に布団でも干すか……………。

俺は布団を担ぎ、そのまま、ベランダの窓を開ける。

「……………おなかへった。」

そこにはベランダの柵に引っ掛かった、インデックス……………じゃなくて、俺の妹。

黒い髪に腰まである長い髪。御坂以上の顔立ちに黒い瞳。そう、俺の妹、朝風真衣。

「……………お前はインデックスか？」

「……………あっ！お兄ちゃん！！！」

言っとくけど俺はシスコンじゃないからな。

第二話 俺って方向音痴なんです。(後書き)

林檎「ふう〜。急展開。」

真衣「ねえねえ、私ってどこの学校行くの？能力は何なの？」

恭介「……………」。

林檎「それは次回でわかる。学校も能力ももう決めてるから安心して。」

真衣「了解ですー!!」

恭介「……………」。

真衣「それにしてもお兄ちゃんの方角音痴は直らないんだね。」

林檎「そう言えば、迷いに迷ってどこかのマフィアと全面戦争したんだろ？」

恭介「……………」。

林檎「……………今回は！真衣の学校を決めます！……………どうぞご期待を……………」

真衣「諦めたね。」

第三話 俺はシスコンじゃないですからね。ただ神様に妹を守ると決めたただけだ

林檎「サブタイトル長いな……………」。

恭介「はあ…………… ホントに俺はシスコンじゃないからな。」

真衣「えー！？がっかり……………」。

恭介「無駄な発言は避ける。誤解を招く。」

林檎「誤解された方が都合がいいから言ってるんだろ？」

真衣「そうですー!!」

恭介「……………面倒だ。」

林檎「じゃあ、第三話どうぞっ!!」

第三話 俺はシスコンじゃないですからね。ただ神様に妹を守ると決めただけだ

side 真衣

「じゃあね〜!!」

「うん!ばいばい!!」

私は友達に大きく手を振る。そのまま、帰路につく。

私の名前は朝風真衣。中学二年生。14歳。

「はあ、お兄ちゃんが死んで一ヶ月か……………」

私はうす暗くなった空を見る。

私のお兄ちゃん。朝風恭介が死んで一ヶ月。

私の周りの世界はがらりと変わった。

お母さんとお父さんはいつも謝りながら、仏壇の前に座ってる。私はその時初めて親の涙を見た。

でも、私は泣けない。いや、泣いてはいけないのだ。お兄ちゃんの方まで幸せに生きなきゃ行けないのに……………」

「なんで……………なんで……………涙が止まらないのかな?」

私の頬に一粒、二粒と、どんどん涙があふれてくる。

お兄ちゃんはあるなにめんどくさがり屋だったけど、優しい人だった。やればできる人だった。

私はお兄ちゃんに何回慰められたらう。数えても数えきれない。

「なんで………！なんで………！！なんで、死んじゃったの！！！！」

私の声が空に響く。

お兄ちゃんが空けて行った空白はあまりにも大きすぎる。

お兄ちゃんは今を助けて死んだ。そして、一人の男の子に将来を頼んだ。

私達はその思いに応えなきゃいけないんだと思う。

「あれ？どこどこだろう？」

しまった、迷った。気が付くと私はどこかの路地裏に来ていた。

私はお兄ちゃんと同じ迷子の血を引き継いでるようだ。

さすがにお兄ちゃん程ではないが私もよく迷う方だ。

だが………、何か変だ。私が迷うって言うても初めて行った場所だけだ。慣れている通学路で迷うなんて、お兄ちゃんだけだと思っただのに………。でも、こっちに行かなくちゃって………。まるで、誰かに呼ばれるような感じがして………。

「ハハッ！コイツが次の被害者か………。」

突然、路地裏の先から声がする。

その先は暗闇で何も見えなかった。だが、体が頭が逃げろって信号を出してたのは分かった。

でも、体が動かない。

「………んじゃあ、殺そうかな。君で百人目だ。」

月明かりで姿が見える。

そこには男の人が一人いた。

最近、この辺で殺人事件が多発していた。だが、すべてに関連性はなく、証拠も見つからなかった。

だが、それがこの前、被害者が九十九人目になった。警察は警備体制を高め、近隣の小学校や中学校は早めに下校するように言われたのだが、私は部活の助っ人として、友達とその後輩の練習を遅くまで見ていた。

すると、男はゆっくりと手を前に差し出す。

「じゃあ、しね。」

男がそう言うと、私の体に激しい衝撃が来る。

そして、どんどん意識が薄れていく。

死にたくない。お兄ちゃんが死んでお母さんにお父さんが泣いてるのに……………。

私が死んだら、2人ともまた悲しんじゃうのに……………。

ダメだ……………。もう……………。

私はそこで意識が途切れた。

「……………」

私が目を覚ますと何も無い空間にいた。

ここは……………？

「ここは神のいる世界。あなたの居た世界で言うなら、天界とでも言うときましよう。」

後ろから声がするので私は振り向く。

そこには私より小さい、身長が145センチくらいで年齢は10歳から12歳くらいの女の子が立っていた。

「あなたは？」

「私は神様ですよ。名前はディオネです。」

……………かみさま？

まさか……………電波ちゃん？

「なんですか！？あなたたち兄妹は人の事を電波、電波って！！！」

えっ？

心読んだ！？あと、兄妹？

「兄妹って……………お兄ちゃんの事知ってるの？」

「はい。ちょうど一か月前くらいに来ましたよ。ここに。」

「一か月前……………？」

「私……………死んだの？」

「……………はい。私達のミスで……………」

「そうなのか……………」

「死んじゃったのか……………わたし……………」

「それで、私があなを転生しますー！」

「転生？」

「何それ？」

「転生とは、死後に別の存在として生まれ変わることです。まあ、肉体は私達が同じものを作りますからちよつと違つんですけどね。」

「へー。」

「ん？という事は……………」

「お兄ちゃんも転生したの？」

「はい。あの人は『とある魔術の禁書目録』の世界に転生しました。」

「とある魔術の禁書目録？」

「お兄ちゃんの部屋の本棚にあったやつかな……………？」

「じゃあ、私もその世界に行くー！ー！」

「えっ!?!」

「……………ダメなの?」

「い、いや、いいですよ!ただ、別の世界に行くのになって思っ
て……………」

「いいの。お兄ちゃんと一緒の世界に行く。」

「……………わかりました。能力の方はこちらで決めますね。」

「はい!?!」

すると、私の後ろに突然扉が出てくる。

「では、二回目の人生楽しんでください!」

「わかった。バイバイ、ディオネ。」

私は扉をゆっくりと開け、中に入る。

お兄ちゃん!待っててね!!

side 真衣 end

side 恭介

「で、気が付いたらブランドに引っ掛かってたと。」

「うん。」

真衣はお茶をすすりながら首を縦に振る。

「この世界の物語がどんなのかは私は知らないけど……………。とにかく！ディオネが言った私の能力が気になるの！」

能力ねえ……………。

俺は真衣の頭の上に手を乗せる。

「ふえ！？なななななにしてるの！？お兄ちゃん！？」
///
///

……………マジかよ。

マテリアル デグレインション
『物質分解』

これが真衣の能力だ。

この世にある物質などを逆算。そして、すべてを原子に分解する能力。レベルは4程度か……………。

「……………案外強いな……………」

「ふおえ！？私の能力わかったの!？」

「ああ、コピーさせてもらったけどな。」

「コピー？」

ああ、そうかコイツ俺の能力知らないんだ……………。
説明するの面倒だなあ……………。

「まあ……………」

〈自分の能力&真衣の能力説明中〉

「……………結構強いよ。私の能力……………」

「まあ、俺には及ばんがな。」

「……………それより!！」

いきなり立ちあがる真衣。

「……………なんだ？」

すると、真衣は部屋の隅に置いてあるゴミ箱を指差す。

「何アレ！？いつゴミ出した！？そしてなんであんなにコンビニ弁当ばっかなの！？」

真衣が指差したその先にはコンビニ弁当の中身が抜けたいわゆる、
ゴミの山。

あと、俺はゴミを出し一回も出したことない。

「なんなの！？このゴミやしきは！？」

どうやら、この汚い部屋が気に入らない様だ。

まあ、ここまでゴミだらけなら普通の反応かな。

「もっつ！掃除するからお兄ちゃんはちょっと出てて！..！」

そのまま俺は、家から追い出される。

はあ……………ホントにアイツもお節介な事だ。
それより……………。

「真衣の学校決めねえとな。」

俺はドアにもたれながら呟く。

「何やってんだ？恭介？」

隣から声がする。

俺はその声がある方向を向くと、この物語の主人公、上条当麻が立っていた。

「……………妹に追い出された。」

「へー……………って！？妹いたの！？」

うるせえ……………。

「まあ、それはともかく。飯食べにいかねえか？」

「……………奢りか？」

「……………上条さんにそんなかつこいい事はできません。」

チツ……………。使えねえな。

「さっき舌打ちしましたか？したよな？」

「はあ、わかったよ。俺の妹の掃除が終わるまでま

「終わ

ったよ！……！」

ゴブツ！」

俺が言いきる前に後ろのドアが突然開く。

俺の頭に激しい衝撃が走る。いてえ……………。

「あつ！？……………ごめん！大丈夫？お兄ちゃん？」

「……………大丈夫だ。」

俺はゆっくり立ち上がる。

土御門から貰った肉体再生オートリバースで頭痛を消す。

「……………これが恭介の妹？」

上条はびっくりした顔をしている。
当り前か……………。性格が全然違うもんな。驚いて当り前だ。

「じゃあ……………ファミレス行くか。」

俺は何かと言われるのが面倒だと思い、ファミレスに行く事を進める。

「えっ？ファミレス行くの？」

「ああ……………上条のおごりでな……………」

俺は上条の方に指を向ける。

「えっ!？」

「わぁ〜!ありがとうございます!…」

「えっ……………あ、ああ……………」

真衣の眼差しに負ける上条。ふう……………これで財布から金を出すという労働が消えた。

「……………ふ、不幸だ……………」

「本当にありがとうございます!!」

真衣が机越しに上条にお辞儀をする。

今は寮の近くのファミレスにいるところだ。

「……………できるだけ、安いのにしてくれよ?」

すみませ〜ん!このページお願いしま〜す!

つてのは冗談。俺は無難に安いステーキを頼む。

真衣はスパゲッティを頼む。上条とは言う……………。

「……………これを……………。」

一番安くて腹が一杯になるような物。

『大盛り!激安!エスカルゴと野菜の炒めのも!!時価280円!』
うん。安い。でも、マズそう。

「はあ……………恭介のせいで今月は三食ぐらい抜きになりそうだ。」

「それは良かったな。」

「よくねえよー!」

すると、真衣が突然話を切り出す。

「ねえねえ、お兄ちゃん。」

「……………なんだ?」

「私って学校何処に行くの?」

……………。

しまった。考えてなかった。

金はあるから何処でもいいんだが……………。

「なんだ?学校決めてないのか?」

「ああ……………学園都市（こくえん）に来たばかりだからな。」

「で、何処行くの?」

考えてないんだよなあ……………。

無難に常盤台中学とか柵川中学とか……………。
てか、これ以外俺は中学校を知らない。

「柵川か常盤台。」

「柵川？常盤台？」

「柵川に……………常盤台！？」

上から俺、真衣、上条だ。

真衣は原作の事を知らない。今日の前にいる上条がこの物語の主人公って事も知らない。

真衣の認識では『ここは超能力開発が学園都市という場所で行われる世界』って事になってる。

俺も魔術とかは教えてない。

何故かというところ……………守りきれない可能性があるからだ。

できるなら、柵川に行って欲しいのだが……………介入とかそういうので……………。

「常盤台に行く！……！」

何故だ？

「うん。何となく。」

いや、やっぱり柵川行け。

「いや。もう決めちゃったから。」

……………もう面倒だ。

「……………受験あるけど頑張れよ？」

「うんっ！……！」

はあ、妹が原作介入する可能性が上がった………………。
できるなら、御坂美琴に出会わなければいいのだが……………。

「いいのか恭介？金あるのか？」

「金なら腐るほどある。」

間違っではない。

はあ、だるいな……………手続きとか……………。

まあ、いいか。

この後、俺はデザートを追加注文。それを上条に払わせるのであった。

第三話 俺はシスコンじゃないですからね。ただ神様に妹を守ると決めただけだ

林檎「……………真衣の能力考えてたら三時間経ってた。」

真衣「でも、そこまで考えるほどの能力じゃないじゃん。」

恭介「大体、俺の能力にはルビはないのかよ？」

林檎「真衣の能力はあとで重要になるからさ。あと、ルビについては出てこないだけ。読者のみなさん！！『能力窃盗者』のルビを募集してます！！どしどし応募ください！！」

真衣「うわぁ……………人任せ……………」

恭介「コイツはそんな馬鹿な奴なんだよ……………」

林檎「……………グスンッ。」

真衣「じゃあ、次回もお楽しみにね！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4749x/>

とある最強の能力窃盗者

2011年10月21日08時13分発行